中村幸彦氏「近世小説史の研究」

村田穆

書評には、例のことながら、著者の意図とその成果を正確に辿るといふことが、前提として必要と思ひます。自分の立場から、他説を切りきざんでみても、無益、といふより寧ろ、有害な暇つぶしに過ぎますまい。

中村さんの近著「近世小説史の研究」の「後語」には、かう書いてあります。

私なりに未開拓、未解決と思はれる分野を追つて来たこととて、対象も、あるものでは作者の意識、あるものでは書肆・読者の問題にわたり、方法も、時に書誌学により、時に比較文学により、舌耕文学や演劇など同時代に存した小説以外の文学様式との交渉をうかがつたことも屢々である。従つて小説史として一貫した体裁を持つてゐない。けれども近世小説史のはらむ種々の問題は、提出し得たかと、ひそかに思つてゐる。

どの稿の執筆でも、ひそかに心したのは次の二点である。一は、各々の様式が、中世の説話的な散文文学から、近代小説へと推移する流の中で、何を脱皮し何を新しく加へたかに、歴史的意義を見出さうとしたこと。今一つは、さうした考からは、悉くを近代的観点から評価しがちになることを恐れて、何ごともその時代の意識に即した理解によつて処理しようとしたこと。共に困難なことであり、合せ行ふことは至難事であるが、その点が、従来の研究で最も不足する所と考へられたからである。

意図は明らかで、而も強い自信が内蔵されてゐます。一読して、確かにそれだけの成果はあがつてゐると、印象づけられます。といつて、おしまひにしてしまふわけにも参りますまいから、しばらく筋を辿つてみませう。

七百六十八字詰三百六十八頁、分つて十二章となるこの本は、各章の中身が充実してゐますだけに、大変な重量感があり、へな〳〵腰で立ち向つては押し潰されさうです。

一、近世文学の特徴

これは「緒言にかへて」とサブ・タイトルしてありますやうに、著者或ひは軽く考へてをられるのかも知れません。楽〻と書かれた感じです。が、そのことと論文の値打ちとは別で、他の十一篇の方が、労作の名にふさはしいかも知れませんけれども、その十一篇を各論として、その成果を踏まへて成るものゆゑ、私は、冒頭のこの論文を重視したいのです。「近世文学の特徴」といふ論題は、近世学者それ〴〵の、研究の水準を示します。だから、これは、緒言であると共に、結論の素描でもあります。事実、こゝから読みはじめて、通読して、もう一度こゝに帰りますと、はじめての時とは、やゝ違つた意味が見出せます。この論文を特に詳しく紹介しようとする意図は、そこにあります。

「一般に日本の近世文学は、町人の文学であり、民衆の文学である」といつた大雑把な概括に対して、「違例」の多いことの指摘から、この論ははじまります。いや、その指摘

よりも、所謂町人作家達が、「自らの文学をどう意識してゐた」かが問題です。彼等はしばしばその作品を、「転合書・慰み草・戯作など」と称してゐます。が、それは「彼等が本当にふざけたり軽い気持からのみで創作に従つたことを意味」するのではなく、「他に社会一般に対して公言して支障のないやうな、今日の言葉で云へば、第一文芸に属する文学が別にあつて、それに対して彼等のその方面の文学が第二文芸であるとすることの謙辞と見做」されるのです。

第一文芸といふのは、「漢詩・漢文・和歌・和文の伝統的文学」をさし、「その創作に際しては」誰も「何の謙辞も用ひてゐない」のです。が、彼等のなまの文学「仮名草子・洒落本・狂歌など」になりますと、「褻の文学、第二文芸と考へて」「謙辞を用ひる」といふわけなのです。

つまり、この区別は、「純粋に創作活動そのものに」あるのではなくて、「二群の文学作品に対する社会的存在意義に関する近世人の意識に原因する」のです。「中世以来の文学意識が完全に払拭されず、もしくは若干の変化があつても更新するに至らず、旧文学が、ただその様式のみをもつて、その権威を依然として把持してゐた。新しく発生した文学は旧文学に見えない様式であり、旧文学から見ると雑多な夾雑物があるの故に、高く評価されず、戯作であり、慰み草と認められたのである。そしてその夾雑物の中に、又は旧文学の様式の中に迄も、やがて文学の定義をすら変更を余儀なくさせる個性の発見、人生の真、リアリズム的表現、それらのことごとくをそなへた散文精神、近代小説性の萠芽がめばえて来ることに留意するものがなかつた。古い文学の勢力は弱まりながら、後退せず、新しく発生した文学は未熟であり、それ等が錯綜した文壇の真姿を、当代人は明察し得ず、古い意識で割り切つた所に出て来たのがこの二つの文学の層である。」といふのです。

この区別を、「近世人は雅俗の区別で考へて」をり、この「文学を、内容を反省することなく、様式や、その新古によつて区別し、そこに階級をつける近世文壇に於ける形式主義は、中央集権的封建社会と言ふ、過渡的社会の投影と見るべきであ」り、「その様な不消化そのまゝを持ちつゞけた近世は」、「文学史上では、中世から近代への過渡期と解すべきで」、「文学を今日、純文学・大衆文学にわかつ如く、人間性への接近による、文学の二大別の傾向が、かすかながら生じてくる」のは、「幕末にな」つてであると、指摘されます。

さて、「所謂町人文学、俗文学」の特色は、といひますと、「近世の雅文学は、」「高級な趣味として」「実生活から遊離する」のに対して、「俗文学の方は」「悉く実用性を持つてゐた」ことが第一に指摘されます。もつとも、「俗文学一般を通じて教訓や娯楽等の実用性が、文学様式の中で、完全に形象化されて」はゐませんでした。

意識的には「既に第一文芸がある以上、実用性でもなければ、第二文芸の存在意義がないと考へたかもしれ」ませんが、「無意識の所では、第一文芸のみでは満足できない文学的欲求が、漸くにして具体的なものとしてあらはれて来たので」す。「人間の生命のいとなみを描写することが出来ない」「旧文学様式の欠を補ふべく、そして現実的な不満を満すべく生れたのが新文学様式で」した。「現世に材を求め、現世的想念を作品にみなぎらすことは、たま〳〵、この欲求と実用性が一致した為で」す。かくて、「その作品に、生活

そのものが生々しく表はれて、時代的な体臭を一杯にみなぎらす結果となり、「超時代的な普遍性よりも、時代的な特色の方が濃厚な文学となつた」のです。

次に、「実用性を持つと云ふ事は多様性を持つことを意味」します。「階級や年齢・性別などによる、向々が、文学様式の中にあ」りました。そして「文学として普遍性を追求する芸術的自覚のない場合は、その体制の中でしかわからない方が、体制中の人々には面白いことにな」ります。「このやうな性質の理解をともなふ表現を、楽屋落と云」ひますが、「近世俗文学には、多かれ少なかれ」その気味があり、「この楽屋落の理解の困難さが、近世俗文学を毛嫌ひする人と、狂をつくる一原因でもあ」ります。

「楽屋落の文学即ち約束の文学とも云へ」ます。「この約束の文学は、古典文学即ち第一文芸の用語で云ふ、余情の文学と合致する部分が多い」のです。違ふところは、「表現技法がすべてであることで」、「職人的であつたとも云へ」ます。

従つて、この種の文学の「珠玉の作品」は、「名人芸のそれと呼」ぶにふさはしく、「名人芸の語は」「ある伝統とか規格とかの中に、既成のものを守りながらその中にみがゝれた個性を生かしてゆく場合を称する」ので、「意識の上では、伝統や自給自足制の楽屋落の範囲からぬけきれないことは、中世的な残滓であり、無意識的ながら個性を出し、大衆的普遍性を持つた作品を生む点は、近代の漸く始まりかけたことであ」ります。たゞ「この埒内に入れて説明し難い、二人の大作家」として、西鶴と芭蕉が指摘されます。

ざつと右の如くかと思ひます。かう要約しながら、要約といふことの、論の生命を失ふ無意味さを痛感しながらも、更に二章以下の各論の素描的な紹介をつゞけませう。

二、仮名草子の説話性

「近世初期には、」「新しい世相の必要に応じて発生した」「教養的な実用的な智識」の供給を目的とする「口誦的なものが」大流行しましたが、その過程に「文芸的なものがそなは」つて行きました。この口誦的なものが、仮名草子の中にはいつてゆくのです。従つて、「説話性を仮名草子の中に求める操作は、仮名草子の中から小説性を析出することと、ある部分では一致」します。

「仮名草子の説話が、伝統的文芸性に乏しかつたと云ふ、歴史的な空白、又は中古中世的文芸性の断絶は、近世小説の発生には、既に完成した権威的なものの影響を直接にうけず、あはよくばこれを批判する余裕を得、勿論、それと異質的なものをはぐくむ苗床となつて、必要であつた」のです。

三、西鶴の創作意識とその推移

「『一代男』は権威ある古典物語に拮抗する意識の所産たる新物語」でしたが、「その主力は素材と表現の面にそゝがれて、内面的な人生探求においては、」「明瞭でな」く、「せいぜい恋愛や性欲は人生の重要問題であるとする程度にとゞま」り、「出来上つた『一代男』を説話様式の作品として見れば、人生探求の度を示す談理の面よりは、面白さを伝へる伝奇の面に専らで」した。

その後、「物や事をつらぬく内面的な理に関心がそゝがれ出し、」「『道』の談理から『世間智』の談理に入」り、遂には、「云はゞ人心の即物的な把握の方法を自得」するに至りますが、而も、「人間の心を、固定の相としてでなく、流動の相で把へんとする」「と共に」「その相が本質であれば、」批判の余地な

しとして、「批判を加へることをやめた」とされます。

四、自笑其磧確執時代

「この確執時代に関する従来の研究が、むしろ自笑の不況に展開したとするに対して、」著者は、其磧の「度々の移転、評判記の比較、自笑の新作者獲得と並べ」て、困つたのは其磧の方であるといふこと、これは「やがてジヤーナリズムの機構の上に全部が載せらるべき運命を目前にひかへる近世中葉の、」「作者と書肆との間に起つた、初めての且つ注目すべきトラブルである」といふこと、その結果「其磧は実質に於いて八文字屋の専属作者となつた」といふこと、それは「健全娯楽の提供者としての社会的な地位と、生活の一つの道として経済的な意義が、」其磧「をしてさうあらしめた。」と説かれてあります。

五、八文字屋本版木行方

八文字屋本の版木が、八文字屋の手を離れて、書肆の間に転々する跡を具体的に尋ね、それらの書肆が何れも「一儲けときほひ立つて、」失敗し没落して行つたのは、八文字屋を含めて、上方書肆の「専属作者制度」といふ「古風な営業法」が、作品の「交換価値」に従ふ「自由競争」の江戸風の「新営業法」に敗れたのであるといふこと、而も、「八文字屋本が、流行におくれながら、尚諸店より刊行され、商品価値を保持してゐたのは」「多く貸本屋の手をへて、「健全娯楽読み物」として、「律義な封建道徳の所有者達であつた、享保以来新しくふえた民衆の読者によろこばれた」といふこと、が述べてあります。

六、安永天明期小説界に於ける西鶴復興

このやうな研究は、従来まとまつたものはありませんでしたが、そこを詳説し、「元禄期の西鶴模倣作には西鶴の持つたあくどさと悪ふざけが寧ろ尊重され、みならはれてゐる」のに対して、この期は、「小説に就いての考へを進歩させ西鶴の作品の好色味よりも人情を認めさせ、悪ふざけよりも写実を尊重させた」ことを説き明かし、更に「明治期のそれは、京伝・三馬の遊楽放縦、春水の浮薄皮相、馬琴の頑冥偏頗にあきはて、西洋小説の刺戟によつて、小説と云ふ芸術の中に、思想・人生観・世界観等を求める風潮が、我が国過去の作者の中にも、尚さうした批評要求に耐へ得るものとして西鶴を見出したことに由来する」と附加されます。

七、洒落本の発生

洒落本の発生をめぐる旧説を検討して、漢文戯作、狂言本、浮世草子、芝居、談義本、評判記との関聯を説き明かし、その中から、「渾然一作品として完成した」「遊子方言」を「分析して、形式は狂言本、文体は談義本、素材は浮世草子から出て、小説の進展の結果としてまとまつた戯作であると定め」られるに至るまでの論。

八、通と文学

通の性格を九条にわたつて分析し、「通は生活理念である。」とされます。が、一般では、通は、それと共に「文学理念」とも考へられ、洒落本は「通の教科書的性格を持つと解釈されてゐる」のに対して、「通は洒落本の理念ではなくて、そのうがちの対象」であり、「このことはまた洒落本も黄表紙も違ひはない」と説かれ、たゞ「これらの作者が、これらの作品を作る心境に」「通人意識が宿つてゐたことが多い。」と指摘されます。

九、読本発生に関する諸問題

「読本の発生と成長に」は、旧説の「中国白説小説の影響」の外に、早くも「読本」と

呼ばれた八文字屋本の時代物、実録軍談、怪談小説、民衆教化の仏教的傾向文学、史書古典、仏教長篇説話類との関聯を詳悉して、その中から、「長篇小説・構成・文体・性格・芸術的真実性・思想性と、」「近代小説として問題にすべき諸点が、」「出そろつた感がある」のが読本である。と説かれます。

十、読本展開史の一齣

京伝の「忠臣水滸伝」は「読本の歴史に一期を劃した」が、それに対抗すべく、上方の書肆は「仏教長篇説話を、」「長篇読本化し」ました。これが、馬琴の「石言遺響」をはじめとして、江戸に流入して、「次第に江戸読本の趣向や素材や文飾源となつてゆ」きます。もつとも、上方の「安易に過去のものを応用する著述態度」に比して、江戸の「中国白話小説や日本の雑史や近世演劇類などを」援用した「新様式創造の熱意」は大変なもので、馬琴の如きは、「歴史小説的方法を物に」するに至るのです。かくて、「次第に江戸と江戸中心の読本界になつてしまふ」といふ論。

十一、読本の読者

読本には三種の区別が考へられますが、ここでは、正統の読本の読者について論じてあります。その読本の特徴は、「隠微・出典・趣向・文飾の一々に気づけば気づいて拍案驚奇せしめる、即ち雅の面と、何の気づかずとも、合巻の読者のやうに起伏重畳なす話の筋の織りなす喜怒哀楽も、読者を一喜一憂、愁嘆し、慷慨せしめる、即ち俗の面を兼持」し、「勧善懲悪の理法をきびしく、最も心して盛込」むものと言はれませう。

この読本の読者は、「小説読者の上層にあ」り、本代は合巻などに比べて高く、出版部数は少く、読者は多く貸本屋の手をへて、本に接しました。従つて、潤筆料も少なかつたのですが、作者の社会的地位は高かつたやうです。内容は、まだ「戯作的な遊びの要素が濃い」が、「批評家と批評が発生した」ことは「第一文芸に並列」するものと言へませう。

十二、人情本と中本型読本

「人情本様式発生に関する既出の諸説を再検討」して、「人情本は中本型読本の一時流行の姿であつた」と結論されます。中本型読本といふのは、「合巻物と半紙本読本の中間に位する読本で、」「洒落本合巻物滑稽本さまざまの様式を取入れることが、習慣として許されてゐ」ました。人情本はこの「中本型読本の性質をうけつ」ぎ、「春水と所謂為永連によつて」「人情本的な特殊な情緒のもり上げ」「がなしとげられた」ものなのです。

以上、大雑把な、核心を射そこねたやうな紹介に終始しましたことについて、著者と読者に寛恕を乞はねばなりますまいが、もし一言余白を埋めますなら、この書は、「近世小説史のはらむ種々の問題は、提出し得た」といふ謙辞を「解決し得た」といふ讃辞に置き変へてもよからうかと思ひます。

尚、中村さんの別著「近世作家研究」(「立命館文学」昭和三十六年十月号に紹介)には、この書の諸論文よりももつと基礎的な研究が、精密に展開されてゐますことを附け加へておきませう。

又、この二書にもれた重要な論文も少くはなく、例へば、「『天下の町人』考」「文学は『人情を道ふ』の説」など、これらは、「近世作家研究」や「近世小説史の研究」といふ枠やら、頁数の関係やらから、省かれたことと思はれます。近く、それらが第三の書として、まとめられることを、待ち望むものです。(昭和三十六年八月)